

特集 島の教育と地域づくり・I



明治の学制発布、小学校令にはじまったわが国の義務教育制度。戦後の新教育制度下では、条件にめぐまれない離島（へき地）の小・中学校について、昭和二八年の離島振興法、翌年のへき地教育振興法などにもとづく諸施策により、施設の整備や環境の改善が徐々に図られ、小規模校のよさを生かした教育の実践が地道につづけられてきた。

しかし、直近の三〇年間をみても、過疎化・少子化とともに離島の児童・生徒数は半減、統廃合などにより学校数も三割近く減少し、休校状態の学校もみられる。

一方、昭和六十年代から、学校存続への危機感などを背景に、島外の子どもたちが「里親」のもとなどから通学する「離島留学」の試みがなされ、徐々に全国の小規模校を中心に制度が広まった。また、平成一〇年頃から、一定の条件のもとで市町村区域全体から児童・生徒の募集ができるようになったことで本土からの「離島通学」がはじまり、現在では一〇以上の島々で定着している。

離島の学校は単なる教育の場にとどまらず、地域発展の核となる存在である。たとえ小規模であっても学校の存続と、長期的視野に立った活性化策は必要である。

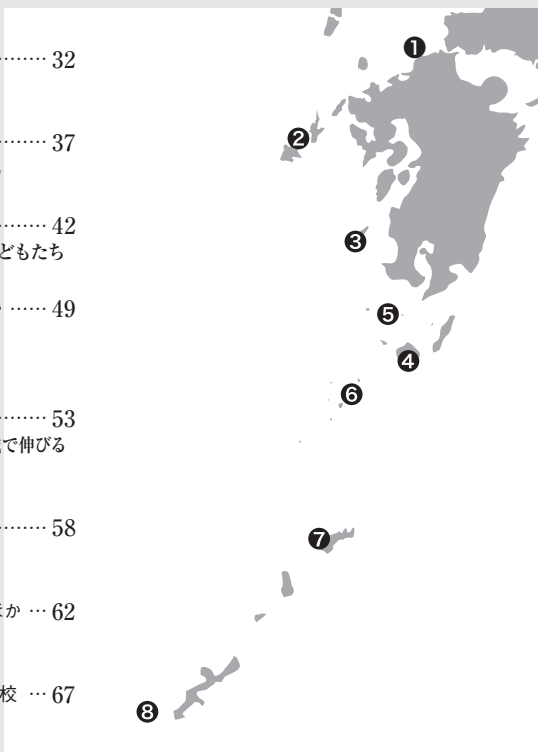
国でも今年度から、離島活性化交付金による「離島留学」への支援が可能となった。沖縄県の離島では、沖縄振興一括交付金を活用したオンライン型の公営学習塾が開設されるようになり、学力アップの成果も表われてきている。

いまだでは在校生と教職員全員が島外からという学校もみられ、豊かな自然と比類なき文化、小さな社会に永く伝えられてきた暮らしを背景とする離島の教育環境は、子どもたちの人間力を高める効果はもちろんのこと、教員の教育力研鑽の場としての効用もある。離島の学校は、広く全国に開かれたものとなりうる可能性をもっている。

本特集では、小・中学校の「離島留学」「離島通学」を実施しているおもしろな事例の実情や課題などについて、行政、学校、住民の立場などからそれぞれ紹介いただいた。

《離島留学》

- ① **地島**(福岡県宗像市)——地島小学校 …………… 32
島に活力をもたらす漁村留学
地島校区漁村留学を育てる会 会長 前田浩昌
- ② **久賀島**(長崎県五島市)——久賀小・中学校 …………… 37
しま留学——学校の「元気」が、住民を勇気づける
長崎県五島市教育委員会 角田亮明
- ③ **下甕島**(鹿児島県薩摩川内市)——鹿島小学校 …………… 42
ウミネコ留学——島で大きく成長して巣立っていく子どもたち
ウミネコ留学制度実施委員会
- ④ **屋久島**(鹿児島県屋久島町)——永田小学校ほか …… 49
発足二〇周年を迎える永田小「かめんこ留学」
屋久島町山海留学実行委員会 岩川俊広
- ⑤ **竹島・硫黄島・黒島**
(鹿児島県三島村)——村内全小・中学校 …………… 53
しおかぜ留学——子どもは家庭で育ち、学校で学び、地域で伸びる
鹿児島県三島村教育委員会 事務局長 児玉 悟
- ⑥ **吐噶喇列島**
(鹿児島県十島村)——村内全小・中学校 …………… 58
島内外が連携して支える山海留学
鹿児島県十島村教育長 有村孝一
- ⑦ **奄美大島**(鹿児島県宇検村)——阿室小・中学校ほか …… 62
校区が一丸となって取り組む「親子留学」
阿室校区活性化対策委員会 副会長 前田博哉
- ⑧ **慶留間島**(沖縄県座間味村)——慶留間小・中学校 …… 67
主体的な行動、助け合いの心を育む島留学
慶留間島留学制度 現地代表 浅倉大地



《離島通学》

- ① **浦戸諸島**(宮城県塩竈市)——浦戸小・中学校 …………… 72
海も船も学びの場——島とともに歩む浦戸の学校
塩竈市立浦戸小中学校 校長 斎藤博厚
- ② **沖島**(滋賀県近江八幡市)——沖島小学校 …………… 77
湖上の学校へ——定期船通学する一三人の子どもたち
近江八幡市立沖島小学校 校長 森本眞左子
- ③ **野島**(山口県防府市)——野島小・中学校 …………… 82
地域の学校を目指す「西島シーサイドスクール」事業
山口県防府市教育委員会 見好敏和

【資料】 …………… 87

「離島留学」「離島通学」
実施小・中学校とその概要

《遠隔教育》

オンライン学習塾の活用と課題 …………… 94

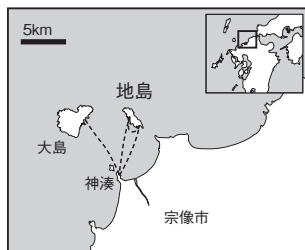
学力と人間力を兼ね備えた人づくりを
本誌編集部



①地島（福岡県宗像市）——地島小学校

島に活力をもたらし漁村留学

地島校区漁村留学を育てる会 会長 前田 浩昌



地島：宗像市の沖合約1.6km、玄界灘と響灘の境に浮かぶ周囲9.3kmの島。野島の宝庫とされ、島内には約6,000本のヤブツバキが自生し春に美しい花を咲かせる。人口は164人(平成28年7月末現在)で、多くが泊区と白浜区の2集落に暮らし、漁業に従事する。

●住民一丸となって学校存続の危機と向き合う

宗像市立地島小学校は、明治七（一八七四）年開校の歴史ある、島で唯一の学校です。戦前には、児童数が一〇〇人を超えていましたが、高度経済成長時代になると島を出入る人が増え、昭和四九年には三〇人まで減少しました。その後もさらに減り続け、平成になってからは一〇〜二〇人で推移し、廃校の危機が次第に現実味を帯びてきました。

当時の小学生や先生方が「これからの地島小学校」というテーマで学習を開始し、それに共感した住民と保護者が中心となって平成一年に「学校存続問題検討委員会」がつくられました。本土にある玄海、玄海東両小学校の児童七〜一〇人に船で二週間通学してもらう「ふれあい通学」

を実施しながら、県内の山村留学先進地などの視察を重ね、約二年間の準備期間を経て同一五年に「地島校区漁村留学を育てる会（以下、育てる会）」が、県内初となる漁村留学制度を開始することになりました。

●漁村留学制度の概要

泊港の目の前に、漁村留学センター「なぎさの家」があります。ここで子どもたちは、生活全般の支援を行う女性指導員と、寝食をともにした共同生活を行います。平日の食事は地元の寮母さんがお世話をし、休日は指導員と子どもたちが一緒に食事をつくっています。

子どもたちは、「自分で出来ることは自分で、自分たちで出来ることは自分たちで」の基本方針に基づき、洗濯物

の児童については、緊急時の対応がとりやすいなどの条件つきとしています。定員は、毎年、男女合わせて五〜六名程度です。

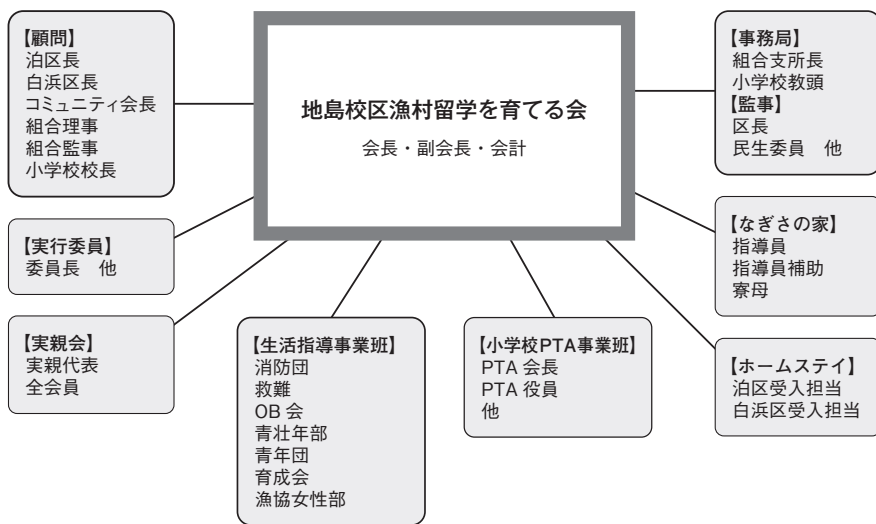
今年度の第一四期生まで、延べ七八名が漁村留学で「地島っ子」になっています。



平成27年10月に新設された漁村留学センター「なぎさの家」。

をたんだり、当番を決めて掃除をしたりします。また、平日は六時三〇分起床、学校から帰った後は一七時過ぎから学習、二一時就寝といった規則正しい生活をしています。留学期間は一年間で、一カ月に一度帰省をするという形態をとっています。対象は、福岡県内在住の小学校四〜六年生児童を基本とし、県外

■地島校区漁村留学を育てる会 組織図



● 制度を支える各種支援

漁村留学の運営を賄っているのは、おもに留學生保護者の負担金と宗像市の補助金です。保護者の負担は、生活費として一カ月四万円を一一カ月。加えて各学期三万五〇〇〇円程度（学校教材費・給食費として約二万五〇〇〇円、医療・小遣いなど約一万円）です。

宗像市と市教育委員会からは、指導員や寮母さんの委託費や施設管理、交流体験事業運営などにかかる経費として、年間約三七二万円の補助金をいただいています。さらに、



櫓を漕ぐ児童。指導するのは漁師である父親。



「なぎさの家」での魚捌き体験。子どもたちは興味津々。

市が昨年一〇月にオープンした地島ふれあい交流施設内になぎさの家を併設し、よりよい住環境の整備をしたり、育てる会の活動に後援・協力いただくなど、物心両面の強力な支援のおかげで、計画的で充実した留学制度の運営ができています。

育てる会は、島の両区長をはじめ、コミュニティ運営協議会、漁協、小学校、島の各種団体長、そのほか地島に関わる多くの方々、実親の会などたくさんの方々が組織されています（前頁図参照）。総会やなぎさの家の定例会などを定期的に実施し、会を中心に島全体で子どもたちを見守り育てています。

● 地島っ子の特徴的な体験活動

地島ならではの教育活動は、地域行事や文化と密接に関係しています。六月の「櫓こぎ体験」、七月の「地島山笠」、九月の「全島大運動会」、一〇月の「みあれ祭の海上パレード」、一一月の「魚捌き体験」、二月の「地島文化祭」、三月の「椿まつり」など、たくさんの方々の行事に子どもたちは積極的に参加しています。どの行事も保護者、島の方々が地島っ子と一緒に活動できることを喜びながら実施しているものです。

帰省をしない土曜・日曜、祝日には、島の方々の

◆学校からみた離島留学◆

宗像市神湊港から市営渡船で約15分。玄界灘と響灘の境に浮かぶ地島唯一の学校・宗像市立地島小学校は、明治7年に開校した創立143年目の歴史ある学校です。本年度は、島の子ども7名と漁村留学の子ども5名の計12名の「地島っ子」が在籍しています。全3学級で、5・6年生5名、2・3年生2名がそれぞれ複式学級、4年生5名が単式学級となっています。

本校の特色は、地島の自然・文化・地域に学ぶ教育活動を展開しているところです。「海」と関わる学習、「椿」と関わる学習、「島の文化」と関わる学習を行っており、これらの体験を通じた学びを、確かな学力を保证するための徹底した少人数授業や個別指導に活かしています。

漁村留学の子どもたちが地島っ子として在籍することで島に多くのものをもたらしており、次の二つは代表的なものです。

一つ目は、言うまでもなく学校存続です。漁村留学の取り組みが始まった平成15年度以降、毎年5～7名の留學生が来ることで児童数10名以上が在籍しています。このことにより学校の廃校どころか、今年度から3カ年計画で小学校大規模改造工事が行われることにもなりました。

もう一つは、島の子どもたちにより効果をもたらしていることです。島の子どもたちだけで生活していると、固定化された人間関係となります。ところが、留學生が来ることで、それぞれに個性をもった子どもたちと交流する機会ができます。多くの子どもたちと学んだり、遊んだり、折り合いをつけたりして、島外の中学校への進学に向けてコミュニケーション能力などの向上が図られています。

このままいくと、島の子どもたちの数は、平成32年度には2名になってしまいます。ますます、漁村留学の取り組みの必要性が高まっていきます。学校としては、留學生も含めた地島っ子の心豊かな成長に向け、地域とともに歩んでいきたいと考えています。また、子どもたちの元気な姿をお見せすることで、地域の活性化の一助となるような教育活動を変わらず行っていきます。

(宗像市立地島小学校 校長 牛島昌哉)

●「なぎさの家通信」で保護者の不安を軽減

歴代の育てる会の会長たちからは、漁村留学制度が軌道

家にお邪魔するホームステイ(年間四回)、地島クルージング、魚・イカ釣り体験など地島に関わる体験活動を行い、島の子どもたちはもちろん、多くの住民と交流することで地島っ子として豊かな人間性や社会性を身につけています。

に乗るまで、行政や地域住民の支援を得るために漁をしなから奔走したことや、子どもたちが安心して生活環境を整えることに力を注がれたと聞いています。

現在私が配慮していることは、留學生や保護者に対するケアです。ホームシックになる、ならないに関わらず、なぎさの家や学校で安心して生活できるよう指導員や学校と密に連絡を取ったり、なぎさの家で楽しい行事を実施して



1年間の漁村留学が終わり、島の住民に見送られる留学生とその家族。

います。

保護者は自分の子どもがどのような生活をしているのか心配しています。そのため、指導員が毎週作成する「なぎさの家通信」を郵送し、子どもたちの生活の様子を詳しく伝えるようにしています。

●子どもたちの進路が留学制度の成果

小学校は島の中心的存在。なくなれば島がなくなるのと同じ——。島の方々はそれくらい学校のことを大切に思っています。また、学校を通じて二つの集落もつながっています。

漁村留学により全校児童数が毎年一〇名を超え、地域行事に地島っ子が参加することで、高齢化が進む島に活気をもたらし、住民の喜びや生き甲斐、地域の団結など多くのものを得ています。だからこそ、住民は漁村留学に協力を惜しまないのです。

漁村留学を経験した子どもたちに、地島で学ん

だ文化や水産業に関心を持ってもらうこともできています。留学生OBの中には、山口県の水産大学校に進学した子、水産高校を経て船員になった子、有人潜水調査船「しんかい六五〇」に携わっている子、地島で学んだ三線さんしんを深めるために琉球大学に進学した子など、漁村留学をきっかけとして進路を決めた子どもたちがたくさんいます。

●将来に向けて

私は、自分たちも子どもたちもみな島に育ててもらいました。ですから、これから先も若い人たちが子どもを育てられる島であり続けてほしいと願っています。地島の高齢化と人口減少は大きな課題です。それでも地島を知っている、活気ある島にしていきたいと誰もが考えています。

幸い、漁村留学を通じて留学生や保護者が地島に愛着を持ち、リピーターとなってくれています。また、全国でも稀な漁村留学は、メディアなどの取材により、多くの人に地島を知ってもらうきっかけともなっています。

今後も行政の支援を受け、漁村留学の取り組みを継続・発展させながら、地島の活性化の一助になればと考えています。

前田浩昌（まえだ ひろまさ）

昭和41年宗像市地島生まれ。「地島校区漁村留学を育てる会」第6代会長。地島小学校PTA前会長。地島および小学校の活性化を願い、漁業を行うかたわら、漁村留学制度を積極的に推進している。